



Title	2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告
Author(s)	スミス, 山下 朋子
Citation	大阪大学英米研究. 2011, 35, p. 13-27
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99348">https://hdl.handle.net/11094/99348</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 2010年度英語プレゼンテーション・スキル 養成講座実施報告

スミス山下朋子

## 1. はじめに

本講座は、財団法人日本英語検定協会と大阪大学外国語学部英語専攻（言語文化研究科言語社会専攻英語部会）の共同研究として行われるパイロット事業で、昨年度に引き続き2度目の試みである。国際的な舞台における英語での研究発表や質疑応答を想定した集中的な訓練を行い、どのような教材、教育方法が効果をあげるのかを調査することを目的としている。今年度も、昨年度と同様に大阪大学・吹田キャンパスで、工学部・工学研究科の学生を対象に講座が開講された。

## 2. 受講期間

講座は、2010年9月6日から9月17日までの10日間にわたり開講された。今年度と昨年度との大きな違いは、2コースを設定し、それぞれの受講期間を短くしたことである。昨年度は2週間のうち平日の10日間を連続で実施しておおむね好評であった。しかし、一部の受講生から「10日間はやや長すぎた」、受講できなかった学生から「理系の学生にとって10日間のスケジュールを研究以外に確保するのは難しい」などという声が挙がったため、今年度は同じ2週間のうち、前半5日間（basic）と後半5日間（advanced）に分け

### 2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告

て実施した。そして、両コースの受講（10日間）もしくは1コースのみ（5日間）の参加も可能とした。昨年度と今年度の受講生数を所属別にまとめたものを表1、2に示す。参加者総数は13名から20名とかなり増加し、各所属の受講生数も増加している。特に、後期課程の学生は、2名から7名に増加したのが顕著な差である。後期課程の学生にとっては、5日間の短期集中コースの方が望ましいと言えるだろう。

表1：2009年度 所属別受講生数

2009年度	学部生	前期課程	後期課程	社会人	計
	4	6	2	1	13

表2：2010年度 所属別受講生数

2010年度	学部生	前期課程	後期課程	計
Basic	3	6	2	11
Advanced	2	2	5	9
計	5	8	7	20

### 3. 受講生

コースの受講生は、表3、4に示したように、工学研究科・工学部の大学院生・学部生で構成される。前半（basic）11名と後半（advanced）9名で、計20名（うち2名は両コース参加）となった。国籍は、日本人の他に留学生（前半1名、後半3名）も含まれ、専門分野も様々で、昨年度同様、バラエティーに富むメンバー構成となった。クラス分けの目安として、前半はTOEICのスコアが500点以上の学生、後半は600点以上の学生もしくは前半のコースを修了した者という受講資格を設定した。なお、申し込み時点では7名の受講生が前・後半、継続して受講予定であったが、都合により5名の受講生が継続を辞退し、2名のみの継続となった。

表3：basic course 学生の基本情報

S#	学科専攻	学年	国籍	性別
1	環境・エネルギー工学専攻	D1	日本	女
2	マテリアル生産科学専攻	D1	日本	女
3	応用化学専攻	M2	中国	男
4	生命先端工学専攻	M2	日本	男
5	地球総合工学専攻	M2	日本	男
6	地球総合工学専攻	M2	日本	男
7	電気電子情報工学専攻	M1	日本	男
8	地球総合工学専攻	M1	日本	男
9	応用理工学科	B4	日本	男
10	応用自然学科	B4	日本	男
11	地球総合工学科	B3	日本	女

表4：advanced course 学生の基本情報

S#	学科専攻	学年	国籍	性別
12	環境・エネルギー工学専攻	D1	日本	女
13	機械工学専攻	D1	中国	男
14	機械工学専攻	D1	日本	男
15	地球総合工学専攻	D1	韓国	男
16	地球総合工学専攻	D1	韓国	男
17	ビジネスエンジニアリング専攻	M1	日本	男
18 <sup>i</sup>	地球総合工学専攻	M1	日本	男
19	応用理工学科	B3	日本	男
20	応用自然学科	B3	日本	女

i 後半の受講者1と同一人物である。

ii 前半の受講生8と同一人物である。

#### 4. 講座の概要

講座は、前半と後半ともに、実施は月曜から金曜日の10時から16時までと

## 2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告

いうスケジュールで、全て英語で行われた。講座を担当した講師は、財団法人日本英語検定協会からの派遣で、製薬会社の企業等でビジネスプレゼンテーションを主に指導しているドイツ人講師1名であった。

講座では、初日にプレゼンテーションに関する基礎的な知識を学び、2日目以降、各自準備して研究分野や研究内容について発表した。その後も様々な形を用い同じ内容、又は異なるトピックでミニ発表の練習を何度も行った。講師は、発表終了後に、各学生に対するコメントを述べた。また、学生同士でコメントやフィードバックを行う時間も作られた。主な内容は以下のとおりである。

- ① 講師によるプレゼンテーションの基本についての説明（その後も要所にレクチャーを含める）。
- ② 準備したプレゼンテーション（各自の研究について）を全員の前で発表。
- ③ 3～4人のグループに分かれ、コンピュータのPPTを見せながら、講師から学んだ表現を用いながら発表の練習。学生同士のフィードバック（ペアワークもあり）。
- ④ 課題のプレゼンテーションを各自修正後、再発表。

昨年度同様、発表の基本についての講義と発表練習以外にも“Check In”という発話の練習の時間が設けられた。これは発音矯正に加え、文法の誤りや語彙を学ぶものである。基本コースの前半はこの時間が数回あったが、後半にはほとんど設けられなかった。昨年度と比べ、各コースの時間が約半分になったため、講師の判断でこの時間が大きく削られた。

## 5. 英語のレベル

講座終了後、受講生のうち15名がSTEP BULATSのスタンダードテストを受験した。このテストは、STEP（財団法人日本英語検定協会）と英国ケンブリッジ大学の語学試験機関であるケンブリッジESOLが共同開発したもの

で、ビジネスに特化した英語能力テストである。BULATSのレベルの判定は、自己申告したTOEICの結果とは多少のズレがあったが、受講生は、CEFR（ヨーロッパ共通枠）の判定レベル<sup>1)</sup>において、全員Independent UserであるB1～B2と判定された。以下の表5に、受講生のCEFR判定レベルの能力記述文とそれに対応するTOEICのスコアを記載する。

表5：TOEIC・CEFR 相関レベルと能力記述文<sup>2)</sup>

レベル：B2 TOEIC 785 点	Can understand the main ideas of complex text on both concrete and abstract topics, including technical discussions in his/her field of specialization. Can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible without strain for either party. Can produce clear, detailed text on a wide range of subjects and explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.
レベル：B1 TOEIC 550 点	Can understand the main points of clear standard input on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. Can deal with most situations likely to arise whilst traveling in an area where the language is spoken. Can produce simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. Can describe experiences and events, dreams, hopes and ambitions and briefly give reasons and explanations for opinions and plans.

表6にBULATSとTOEICの結果の一覧を示す。BULATSの総合スコアが高いものから順に並んでいる。

上記の結果のように、昨年度と同様、B1からB2までという中級レベルの中で幅がある受講生層であった。しかし、担当講師は、どの受講生も基本的なプレゼンテーションのスキルを身につけるということがコース受講の目標

## 2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告

表6：BULATSの結果とTOEICのスコア<sup>3)</sup>との比較

S#	BULATS Score			CEFR Level	TOEIC score
	Overall	Listening	Reading		
14	74	70	77	B2	775
19	67	56	77	B2	745
6	61	58	62	B2	825
13	60	56	62	B2	730
20	58	58	58	B1	897
3	57	58	56	B1	680
4	56	58	55	B1	610
9	56	64	50	B1	550
10	54	56	54	B1	750
15	54	54	55	B1	705
8	53	47	60	B1	750
17	52	52	55	B1	640
1	49	43	55	B1	710
7	49	37	61	B1	630
16	46	45	45	B1	/

となっていたため、レベルの差は特に問題なかったという見解を述べた。レベルの差が各々の学生の習得の大きな弊害にはならなかつたと思われるが、今後、同様のクラスを開講する際は、レベルを分けることで、授業の効率が向上する余地はあると考える。

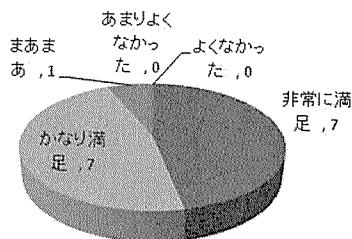
クラス分けを英語のレベルで行う場合であるが、今年度のようにTOEICのスコア500点以上のBasicと600点以上のAdvancedに分けたのでは、はっきりとしたレベルの差は見られなかつた。区切りをさらに高くして、CEFRのB2と見なされるTOEIC785点で分けることは可能であろう。

## 6. アンケート調査の結果

受講終了後、受講生にアンケート調査を実施し、15名から講座に対するフィードバックを得た。今後の参考になると思われる8つの設問に対する回答を以下にまとめる。

### ① 講座に対する満足度

非常に満足	7名
かなり満足	7名
まあまあ	1名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名



まず、講座全体に対する満足度については、以上のように、ほとんどの学生が満足しているという評価だった。「まあまあ」と回答した受講生は後半のadvancedコースに参加した学生である。その学生にどこが問題だったかを尋ねると、幾つかの重要なスキルを学んだが、「advanced」というほど上級レベルの内容ではなかったという回答であった。前述したように、今回のレベル分けは特に大きな差は見られなかったので、TOEICの最低点を見直す必要があるだろう。

### ② 実施期間について（月～金、10時～16時）

- a) 丁度良い：7名
- 実施時期はちょうど良いと思う。しかし、講義時間が一日5時間は少し長いと感じた。
- 丁度良かったと思います。研究活動と平行しますので、長すぎたら参加できないかもしれません。

2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告

- 丁度よかったです（ベーシックコースのみ参加しました）

b) 長い：2名

- 少し長かった。人のプレゼンを聞いている時間が非常に多く、少し苦痛だった。
- 少し長かった。プレゼンの練習は大事ですが、練習内容にもう少し変化があればよかったです。

c) 短い：4名

- 今回は出張でBasicにしか参加できなかつたため、少々期間は短かった気もしますが、内容的にはかなり充実していたと思います。ですが、やはり2週間位がちょうど良いのではないですか。
- 1週間は短いと思います。ですから現在2週目の講座に参加しております。
- 私はAdvancedしか参加していないのですが、時間が少し不足していたと思います。

d) その他：1名

- 9月は学会シーズンなので、8月にしてほしい。昨年もプレゼンテーション講座を受講したかったが、学会と重なったため断念しました。

e) 無回答：1名

実施期間については、5日間で良かったという意見が7名で一番多かった。反対に短かったという感想も4名から挙がり、さらに講師からも5日間ではスキルを十分に体得するまでには達しなかったというコメントがあった。しかし、2コース連続で受講予定だった者のうち前半のみを受講した学生の中でも5日間で十分だったという意見の方が多く、やはり現実的には5日間が

適当であったと考えられる。理想的には昨年度のように10日間実施する方が教育効果は高いかもしれないが、このようなスキルがあることを知り、練習する機会としては十分であったと思われる。受講を契機として、今後、学会発表などで今回学んだスキルを実際に活用し、身につけてもらいたいと感じている。

次に、③から⑥は授業内容についての設問に対する主な回答をまとめる。設問内容は以下の4点で、授業の大切な要素だと考えられるものである。

- ③ 講師が行った講義について（重要ポイントは数日に分けられて説明された）。
  - ④ 全体もしくはグループやペアに分かれてプレゼンテーションを何度も練習したことについて。
  - ⑤ プrezentationの練習時や終了後に講師がフィードバックを行ったことについて。
  - ⑥ 講師ではなく、学生同士がプレゼンテーションについてフィードバックしたことについて。
- 
- ③ プrezentation・スキルの講義について
    - 実践型で、わかりやすく良かったです。
    - 先生は、各生徒のレベルに合わせて教えてくれたので、すごくわかりやすかったです。
    - 単純にたくさんの知識を詰め込むのではなく、要点を絞って講義してくれたので、ポイントがわかりやすく理解しやすかったです。
    - 1時間ほど集中して講義していただき、要点をまとめたプリントもいただき、十分です。これに時間を割きすぎてマンネリ化することもなかつたです。
    - とても満足しています。今回は、スケジュールの関係で、Basicコース

## 2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告

しか受講できませんでしたが、本当は2週間全部の講義を受けたかったです。

- プrezen前の必要事項やプレゼン中の注意事項などを知れたのは非常に有益だったと思う。海外での発表に役立てたいと思う。

- ④ プrezenテーションの練習（回数、内容など）

- 丁度良いと思います。
- いきなり実践的な練習だったので、多くの回数をこなせ、十分な練習回数が設定されていたように思います。
- 1週間、一つのプレゼンを繰り返し、質を向上させるのはとても効果的でした。ただ、もし2週間参加していたら、おそらく2週目は1週目と違うトピックでプレゼンしたくなるだろうと思います。
- 一日に最低一度は他の人に自分のプレゼンを聞いてもらう機会があり、良かったと思う。
- 少しマンネリに感じた部分があった。
- ほぼ毎回同じ内容のスライドを使うので、少し多い気がしました。
- それぞれのプレゼンを1回ずつするのではなく、いろいろなテーマでプレゼンをしつつ1つのテーマに関しては改善・発表を繰り返せたので、自分のプレゼンについての注意事項が非常によくわかった。
- 単純に自分のPPTを使ってプレゼン練習をするだけでなく、即席プレゼンや他人のプレゼンをプレゼンするなどといった様々なシチュエーションでの練習があり、楽しんで臨めた。

- ⑤ 先生からのフィードバック

- 各生徒のレベル、正確に的確にアドバイスをして下さったので、すごく良かったです。
- 非常に丁寧で、分かりやすかったです。
- 改善すべき点をはっきり指摘していただき、よかったです。

- 毎回良くなつた点、改善すべき点を両方的確に挙げてくれ、とてもためになつたと思う。
- 適切なコメントをいただきました。ただ、実行するのは難しいですが…
- よく見ていてくれていたので、自分では注意しきれていなかつた個所を的確に指摘してくれていたと思う。

#### ⑥ 他の学生からのコメント

- 異なつた分野、学年の人々からもらったコメントはすごく参考になりました。
- みんな積極的で、雰囲気の良い授業でした。
- 厳しい意見も飛び交い、充実していました。
- はじめは皆さん遠慮気味でしたが、休憩時間の雑談などで打ち解けて、最終的に、皆さん積極的に指摘できるようになり、いい雰囲気になりました。
- 最初はあまり出ませんでしたが、授業後半は皆積極的に意見するようになりました。
- 色々な意見をもらえたが、自分も含めて皆少し遠慮したコメントになつてしまっていたと思う。
- 自分の発表のどこが分かりにくいかが質問等を通して良く理解できた。
- 学生からのコメントが、本当にためになりました。

以上のコメントから分かるように、実践的な講座でプレゼンテーションのスキルを学ぶ第一歩としては十分だったと考えられる。同じような練習も続いたため「マンネリ化」というコメントも若干寄せられたが、5日間という短い日程だったのでそれもやむを得なかつたのではないだろうか。

最後に、講座全体の中で最も良かった点と改善点に関するコメントをまとめます。

## 2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告

### ⑦ 今回の講座で一番よかったこと。

#### 〈プレゼンテーションに関すること〉

- わかりやすく、効果的なプレゼンテーションを学ぶことができたこと。
- 他の分野、様々な人のプレゼンテーションを見ることができたこと。
- 英語で初めてプレゼンできたこと、またプレゼンを聞けたこと。
- プrezenに対する基本的なことを繰り返し勉強できたことです。また、少しプレゼンについて自信をもつことで、以前と比べると堂々と発表することができるようになったと思います。
- 様々な英語プレゼンスルを学べただけでなく、日本語・英語に関わらず役に立つプレゼン術を学ぶことが出来たと思う。そして何より授業 자체が楽しかった。

#### 〈英語そのものの学習について〉

- 楽しく英語を学べたこと。
- 英語でコミュニケーションをする機会を持ってて、多少の自信につながったこと。
- 苦手な英語の授業を大した苦もなく楽しく受けられたこと。これによって、英語への苦手意識が若干薄れた気がします。
- 英語に触れる時間を持てたことです。
- 数年前のNHKの英語講座で、アメリカの大学の留学生クラスの授業を取り上げた番組があり、あこがれていたのですが、今回のプレゼンのコースはまさに番組そのままでした。嬉しかったです。

#### 〈その他〉

- 人数が8人くらいでよかったです。
- 異なる学科の人と仲良くなり、それぞれの研究内容を知ることができた。

- ⑧ 何かこの講座で不足していたものや必要なかったものなど、改善点を挙げてください。

〈プレゼンテーションに関すること〉

- スライドの指導が不足していた。
- 例文、特にアカデミックなプレゼンテーションをする際に必要な構文など。
- 國際学会用のプレゼンテーション。
- 基本的にとても満足しています。強いて言えば、オーディエンスは基本的に最後まで受講生と先生という固定メンバーだったので、最後のプレゼンなどでは自分のプレゼンをまだ聞いたことが無いような人にも聞いてもらい、初見でも自分の発表を理解してもらえるのかを確認したかった。

〈人数や期間に関すること〉

- 募集人数が最大20人でしたが、20人参加した場合は今回の授業内容では時間が足りないと思います。
- 一週間連続するより、時間をあけて授業をした方が、復習する時間があるため知識が定着したと思う。

〈その他〉

- すでに研究室に配属している学生は、自分のパソコンを持っていますが、3回生の学生さんだと自由にパソコンを使える環境にいない学生さんもいるので、パワーポイント作成は大変だったと思います。

最も良かった点であるが、去年と比べて今回はプレゼンテーションと英語についての感想が多くかった。それは、講座の期間短く、講座内容がプレゼンテーション・スキルを訓練することに集中していたからかもしれない。

今後の改善点として取り入れるべき項目は、スライドの指導と発表に用い

## 2010年度英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告

られる表現だと考えられる。昨年度は10日間の実施だったので、スライドの指導も基本的な部分だけでとどまらず、かなり細やかな指導ができたが、5日間で同レベルの指導は不可能であったと思われる。また、発表に役に立つ表現としてはsign postingと言われる導入や切りかえの重要表現は紹介されたが、学会発表のための表現までには及ばなかった。この2点に関しては次回の課題にするべき点である。

### 7. おわりに

今年度、講座を見学して感じたことを昨年度の講座と比較しながらまとめてみる。まず初めに、各受講生の最初と最終のプレゼンテーションを比べてみると、構成、内容ともに向上了っていた。昨年と比べ期間が短かったため、さらなる練習が必要と思われる面もあったが、各学生最低限必要なスキルは身に付いたと考えられる。アイコンタクトや立ち振る舞い、そしてQ&Aのやり取りも練習を重ねるうちに、個人差はあるが最後には満足できるレベルまで達していた。また、後期課程の学生の多くは、受講開始時点で発表そのものには慣れていたが、分かりやすく説明するということでは様々な問題がみられた。しかし、講師や他の受講生からフィードバックを得て練習を重ねることで、最後の発表では、そのような問題も大きく改善されていた。全体的に見て、英語の能力には差があるても、それぞれ必要なスキルを学ぶことができたという印象である。

次に、異なった学年や専攻の学生が混じって学習したことは、コメントにもあったように有効であったと思われる。特に専門が異なる学生に自分の研究について説明することは非常に難しいことだと気づいたり、確認したりすることは重要である。また、受講生達は、様々な分野の研究を知ることで視野を広げられたと考える。学年に関して言えば、ポジティブなコメントも見られたが、問題点もあったようだ。講座終了後、数名の学生から口頭で「研究内容がまだ定まっていない段階の学部生と後期課程の学生が研究について

スミス山下朋子

発表するのは差がありすぎてやりにくかった。学部生が可愛そうだった。」などという意見が挙がった。今回は後期課程の学生の参加が大幅に増加したため、発表内容がより専門的になり、差が顕著に現れてしまったためかもしれないが、今後、学部生が受講する際に考慮しなければならない。

2年連続、講座が開講されたが、工学研究科・工学部の学生は、プレゼンテーションのスキルを学校教育で学ぶ機会があまりないようである。基本的なスキルを学ぶことは、英語だけではなく、日本語のプレゼンテーションも上達するというコメントがあったが、今回学んだスキルは幅広い応用が可能であろう。今年度の受講生の一名は、講座終了後学会に参加し、日本語で発表して優秀論文賞を受賞した。その学生からは、「本講座の経験を生かすことができて良かった」というフィードバックをもらい、この講座の教育効果を再確認できた。

注記

- 1) CEFRとは2001年に欧州評議会（Council of Europe）が制定したヨーロッパにおける外国语学習到達度を評価する共通のガイドラインである。レベルは、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6つに分けられ、「～ができるならばレベルはこうである」という学習者の「できること」つまり、例示的能力記述文（Can-Do Statements）からレベルを明らかにする方法である。
- 2) [http://www.ea.toeic.eu/fileadmin/free\\_resources/ETS\\_Global\\_master/TOEIC\\_L\\_R\\_can-do\\_table.pdf](http://www.ea.toeic.eu/fileadmin/free_resources/ETS_Global_master/TOEIC_L_R_can-do_table.pdf)より抜粋。英検の情報は筆者が追加した。
- 3) TOEICの結果は全て自己申告である。